

《単位互換提供科目詳細（シラバス）》

* 科目 No.	2910
----------	------

科目概要記入欄

1. 開設大学	島根県立大学	開催方法	<input checked="" type="checkbox"/> 対面（ 浜田キャンパス ） <input type="checkbox"/> オンライン（同時・録画・資料提示） <input type="checkbox"/> 対面（ ）・録画			
2. 科目名	正式科目名	自然保護思想			クラス名	
	副題				配当年次	1
	旧科目名					
	学問分野	番号	16	名称	人文科学系その他	
	サテライトで開講される科目の科目群			A群	B群	
3. 担当教員名	北尾 邦伸					
4. 単位数	2 単位		5. 開講学期	春学期（集中）		
6. 開講期間 曜日・時間	2021年9月6日（月）～2021年9月9日（木） 集中講義 9：00～ 18：00					
個別開講日	1回目 /	2回目 /	3回目 /	4回目 /	5回目 /	6回目 /
	7回目 /	8回目 /	9回目 /	10回目 /	11回目 /	12回目 /
	13回目 /	14回目 /	15回目 /	16回目 /	試験日	/
7. 基礎知識の有無	2. 「基礎知識を必要としない科目」					
8. 募集人数 （総授業定員）	5 人 （ 人）		9. 定員超過時の 選考方法	書類選考		
10. 科目内容・ 授業計画	<p>わたくしは、若かった 1970 年代初めに、ある哲学者（花崎皋平）の「人間-環境系における自然」についての一文に感銘を受けた。「大地としての自然、富としての自然、風景としての自然という三つの層をもつもの、そして人間がその全体性において生きている場、すなわち生存と富と美との統合的な実現をはかる場である。」とあった。現在、その環境的自然は、地球全体的な自然ともなっている。ところで、「自然」を保護するとはどういうことか。どのような自然を、どのように保護すべきなのか。そして、自然保護の「思想」とは。はたまた、人間がある高みに立って外なる客体的自然を保護する、という意味合いをもつ「自然保護」なる用語は、地球環境問題が叫ばれている時代（「環境の世紀」としての 21 世紀）にあっては座りが悪い。</p> <p>とはいつても、地球システムと自然・生態系が危機に直面し、近代合理主義的精神の形成と産業革命（工業化・市場経済化）を経て、現代文明が限界に達している現代。ここに至って「自然保護思想」は、人間中心的な自然支配が進展してこそ発展があるとする精神の習慣（裏面での、この自然状態の恒続性・無尽性への甘えと依存）からの脱却過程における、新たな自然と人間の関係構築をめざすところの思想、とでも概括できよう。</p> <p>本授業では、フロンティア精神を培った原生自然の喪失に直面しての保存的自然保護からはじまり、「自然の内在的価値」「自然の権利（the rights of nature）」「動物の解放」といった「自然権（natural rights）」の拡張解釈的思考や、生態学的見地（アルド・レオポルド、レイチェル・カーソン）の導入があって、哲学史上はじめて人間-自然関係の倫理学である「環境倫理（学）」を生み出したアメリカの自然保護思想を中心に講じる。それら思想はディープ・エコロジー（現実をとらえてのバイオリージョナリズム：「生命・生態地域主義」の「行動」へ）、トランスパーソナル・エコロジー、エコシステムマネジメントなどの思想へと展開を遂げながら、国立公園、原生自然保護地、海洋哺乳動物保護法、絶滅危惧種保存法などを生み出し、日本にも多大な影響を与えてきた。また、日本人の自然観や、「人も入り込んだ自然（入り込んだ人間の営為がいつしか自然の一部となっている）」の里山の思想について講述し、さらに、「諸法実相」の枠組みでの叡智界への「悟り」の思想にも言及して、自然保護思想のとらえ直しも試みてみたい。</p> <p>【到達目標】多様に、かつ多次的（異質）に自然保護思想があることに興味をもち、受講生諸君がこれらと思うものをいまま少し学びたいとの意欲が湧いてくるような授業にしたい。そのためにも、紹介した図書を読み込むことを可能とする基礎的知識の獲得を目標とする。</p> <p>第1回 イントロ： 本授業の趣旨および全体構成 「保護」をめぐる protection、preservation、conservation、reservation、restoration 自然保護・環境保全に関する国際法等の出来事年表 わたくしのスタンス：拙稿「森への自省的回帰」、拙稿「森林化社会の社会学—知床問題からの接近—」</p> <p>第2回 自然保護思想の誕生： 19C 中頃のアメリカの時代情況 「アメリカ」というナショナル・アイデンティティ形成（アメリカ的民主主義とアメリカ的個人主義・自由主義）に果たしたフロンティアが消滅へ フリーランドのアメリカ：開拓民に土地をフリー（無料）で与えたホームステッド法 ターナーの「フロンティア理論」は 1893 年発表 「ウィルダネス（原生自然）＝野蠻・克服すべき対象」との考え方の見直し</p> <p>第3回 原生自然の「保存」の思想： エマソンおよびソローの超絶主義（教会はもとより聖書をも超えて直接的に神の世界へ・原生自然へ）、および自然保護の父といわれるミューアのナチュラルスト思想 ヨセミテ峡谷での活動とシエラクラブの創設（1892 年） イエローストーン国立公園（1872 年に世界で初めて国立公園指定）</p>					

<p>10. 科目内容・授業計画</p>	<p>第 4 回 アメリカ国有林の誕生： アメリカ国有地での保留地（リザーベーション）設定と国有林経営への移行 セオドア・ルーズベルト大統領と初代森林局長官ピンショー ピンショーの自然保護思想 [ワイズユース（賢い利用）を含む自然の保全 (conservation) ⇒1960 年の多目的利用・保続収獲法 (Multiple Use Sustained Yield Act) へ]</p> <p>第 5 回 レオポルドとカーソンによる生態学的視点： レオポルドの「土地倫理 (land ethic)」、自然の共同体の一員としてのヒトによるワイルドライフ・マネジメント (野生動物管理)、『野生のうたが聞こえる』 カーソンの『センス・オブ・ワンダー (The Sense of Wonder)』、『沈黙の春』 (農業等の化学物質の散布によってもたらされる鳥たちの鳴かない春。人間の社会・文明にむけての警告)</p> <p>第 6 回 人間中心主義思想 (アントロポセントリズム) からの脱却： 自然の内在的価値、自然の権利 (ロデリック・F. ナッシュ)、動物の解放 (ピーター・シンガー)、「樹木の当事者適格 (Should Tree Have Standing?)」(クリストファー・ストーン、自然物は法的な権利主体として法廷に原告として立てるか) これら思想形成の背後にあった 1950 年代後半からの黒人公民権運動 (Civil rights movement) 1964 年に公民権法成立、アメリカの自由と民主主義の再構成</p> <p>第 7 回 宗教 (キリスト教) の緑化： リン・ホワイトによるキリスト教の人間・自然観に対する問題提起 (『現在の生態学的危機の歴史的根源』、『サイエンス』誌 1967 年 3 月号) キリスト教・神学側の対応；もう一つのキリスト教といわれたフランチェスコ修道会の設立者聖フランチェスコの教えを引き出したりしての聖書の再解釈 [被造物の平等性を示すといわれるジョット 14C のフレスコ画「(聖フランチェスコの) 小鳥への説教」] が有名]、神からの信頼・信託を受けての自然管理・自然保護概念 (「スチュワード・シップ」) の創出</p> <p>第 8 回 種の保存法とエコシステムマネジメント： 動物の福祉・愛護と動物の権利 ラムサール条約に見る渡り鳥の保護 絶滅危惧種の保存 [わたくしがオレゴン州立大に文科省の短期留学で滞在していた頃の、流域管理 (Watershed management) とエコシステムマネジメントによるキタ・ニシヨコジマフクロウの保存の取り組み、および管理手法としてのアダプティブマネジメント (「順応」的管理) を紹介する] 昨今の反捕鯨運動の行動と考え方について (日本の伝統的漁業である「マタギ」狩猟の精神世界との対比も)</p> <p>第 9 回 エコツアーリズムに見る自然保護思想： 国連の「国際エコツアーリズム年」(2002 年) [その岩波書店「科学」誌の特集号掲載の拙稿「地域のなりわいとエコツアーリズム」] 神の庭に遊ぶ [わたくしが毎夏休みに関西の学生を引率して出かけていた倉本聰主宰の富良野自然塾の季刊誌名が「カムイミントラ」(神の庭)。その富良野自然塾の体験の紹介]</p> <p>第 10 回 ディープ・エコロジー： 功利主義 (Utilitarianism；ここでは、人間の利用主義的な構えでの対自然観) を超えたアルネ・ネスのエコロジー思想 井上有一他『ディープ・エコロジー』の内容紹介 ディープ・エコロジーのプラットフォーム原則 ピーター・バグ主導のプラネット・ドラマ協会によるバイオリージョナリズム (生命地域主義・生態地域主義) 運動 Re-inhabitation (棲みなおし、再定住) [住んでいる場所に根付き、土地とのかかわり合いを常に意識しながら生きる] ヨーロッパの緑の党</p> <p>第 11 回 自然のとらえ方をめぐるキリスト教と仏教： ロゴスの枠組みと諸法実相の枠組み (川崎謙『神と自然の科学史』) ワーウィック・フォックス『トランスパーソナル・エコロジー—環境主義を超えて—』の仏教的思想への接近 (この著書の最終章の結びは道元『正法眼蔵』からの引用) 頼住 光子『道元』の紹介 河合隼雄『中空構造日本の深層』、鈴木大拙『日本的靈性』についての若干の言及</p> <p>第 12 回 日本人の自然観と日本文化： 自然を森羅万象・山川草木悉皆仏性と捉えた日本人とその自然観 詩歌、俳諧、絵画、茶道、華道などに見る自然の感じ方や捉え方 レヴィ=ストロース『野生の思考』(野生の思考を持続的に保持してきた日本人へのレヴィ=ストロースの高い評価、中沢新一の野生の科学研究所 (明治大学))</p> <p>第 13 回 市民による「里山」の発見とコモンズ論： 自然と人間の「共同の営み」の宇宙=里山 拙稿『『里山』の発見とその展開方向』、拙稿「市民社会論としてのコブunkaモンズ論へ」 テイクオフからランディングへ、文化生態系 内山節・鬼頭秀一他『ローカルな思想を創る』</p> <p>第 14 回 ロハス思想のもとでの生き方： ロハス=Lifestyles Of Health And Sustainability 木村麻紀『ロハス・ワールドレポート』、福岡伸一『ロハスの思考』、ウェンデル・ベリー『ウェンデル・ベリーの環境思想—農的生活のすすめ—』</p> <p>第 15 回 フィジオクラシーの思想 (自然の経営管理とデモクラシー)： 自然秩序の貫徹 (自然による「生産」) と人間の社会・経済システムの側のその秩序への「順応」「合流」 国連ミレニアムレポートの「生態系サービス」(ファンドとサービス) 自然を耕す文化としての農業 (アグリ・カルチャー；culture の語源はラテン語の colere=耕す・ケアすること)、自然の世話をする「農業」、サービス産業としての農林業 「太陽と緑」(物質循環とエネルギーフロー) の経済 [詳しくは秋学期の「環境保全論」へ]</p> <p>第 16 回 まとめ 試験 (総括レポートの作成)</p>						
<p>11. 試験・評価方法</p>	<p>出席状態 40%、数回の中間ミニレポート 30%、最終総括レポート 30%</p>						
<p>12. 別途負担費用</p>	<p></p>						
<p>13. その他特記事項</p>	<p>&lt;参考文献&gt; 北尾邦伸『森林環境と流域社会』、鬼頭秀一『自然保護を問いなおす』、R.F. ナッシュ『自然の権利』、W. フォックス『トランスパーソナル・エコロジー』、梅棹忠夫『文明の生態史観』、中沢新一『対称性人類学』</p> <p>じっくりと本を読むことを身につけてほしい。最初はたいへんでしょうが、やがてつぎつぎと読み込めるようになってきます。</p>						
<p>14. サテライト科目の 社会人受講について</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="450 1993 1145 2045">                 科目等履修生 (単位付与) として受け入れ             </td> <td data-bbox="1152 1993 1295 2045">                 可             </td> <td data-bbox="1302 1993 1436 2045">                 否             </td> </tr> <tr> <td data-bbox="450 2049 1145 2098">                 聴講生 (単位認定不要) として受け入れ             </td> <td data-bbox="1152 2049 1295 2098">                 可             </td> <td data-bbox="1302 2049 1436 2098">                 否             </td> </tr> </table>	科目等履修生 (単位付与) として受け入れ	可	否	聴講生 (単位認定不要) として受け入れ	可	否
科目等履修生 (単位付与) として受け入れ	可	否					
聴講生 (単位認定不要) として受け入れ	可	否					

※コロナ禍の影響により、対面授業はオンライン (同時・録画・資料提示) へ変更になる場合があります。